第６回　地域共生社会推進全国サミット in いこま

# 実行委員会発表

# 実行委員会発表　令和６年10月11日（金）14:30 ～ 15:30

## たけまるホール　大ホール

### 第６回地域共生社会推進全国サミット in いこま　実行委員会

前半・後半トータルコーディネーター：生駒市特命監　田中 明美

**～前半～**

| | |
|---|---|
| 生駒市農業振興協議会 | 井上 良作 |
| 生駒市福祉政策課 | 上野 貴之 |
| 社会福祉法人どんぐり | 山本 弘二 |
| 生駒市老人クラブ連合会 | 加来 洋八郎 |
| 生駒市広報広聴課 | 村田 充弘 |
| 社会福祉法人萌 | 山口 健一 |
| 社会福祉法人いこま福祉会 | 大谷 健太郎 |
| 生駒市社会福祉協議会 | 宮西 泰介 |

**～後半～**

| | |
|---|---|
| 国立大学法人奈良先端科学技術大学院大学 | 中川 賀史 |
| 生駒市民生委員・児童委員連合会 | 松山 敏宏 |
| 株式会社やまと | 原田 秀昭 |
| 一般社団法人無限 | 石田 慶子 |
| 一般社団法人和草 | 溝口 雅代 |
| 生駒市ＰＴＡ協議会 | 川本 綾子 |

▽田中：

さて、この地域共生社会推進全国サミット in いこまは様々な分野からお集まりいただいた、市長も申しておりました 42 の団体から生まれた実行委員会であります。

その実行委員会が本日の開催に向けて、1 年半以上かけて本当にいろいろな取組を進めて参りました。

まずはその取組を動画で 10 分ほどですけれども、みなさんにご覧いただきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

～動画上映～

▽地域包括支援センター　古東：

地域包括支援センターで看護師として、高齢者の方と接しているんですけれども、高齢者の方はいろんな病気を持っておられて入院とか退院することが増えたりするので、そういう時にも生駒市では様々な医療教室というものがあるので。また自分がやっていた畑仕事や様々な趣味活動に入っていただくことで住み慣れた地域で安心して生活されるような暮らしをしていただくというのが目標であるかと思います。

近隣の地域の方に、その庭でお野菜を作ってもらったりとかしているんですけれども、その庭で採れたお野菜を使って食事会を開催したり、秋には近隣の保育園の園児たちと高齢者が一緒に芋堀りをする行事もやっています。

様々な世代の方々とつながって役割を持つということが地域共生社会になっていくと思いますし、そういった活動を地域づくりとして今後も行っていきたいと思っています。

▽株式会社近商ストア　井上：

買い物支援が必要なお客様のところに定期的に週 1 回ないしは 2 回、ご自宅の前へ行って直接その場で商品を選んでもらって買っていただくというような仕組みです。こういった事をこの人望んでいるちゃうんかな、ということが分かりやすくなったり、喋りやすくなりました。

僕も今もう 57 歳です。これから人に頼めるところは頼んだ方がいいのだろうなと。高齢者の方が前向きに、できない事をできる人に任せていこうと考える事ができたら、次世代がもっと輝けるような未来になれるんちゃうかなって思えるようになったのは、豊田サミットに参加させてもらって感じた事です。

▽いこま育児ネット　清水：

プラレール広場は最初、市役所の中でいらないプラレールを集めてくださり、引き出しに 3 つ分いただきました。広場を見た方が家庭で不要になったプラレールを次々寄付してくれて、10 年以上活動が続いています。子どもたちが楽しかったと言ってくれるのがすごく有難いし、それが私達の活動の糧になっています。

私達の活動が誰かのためになっているのかもしれないけれど、私たちも誰かが支えてくださっているからできる事であって、そうやって回っていくんだなと思います。

最初は地域共生って福祉のプロの方が色々な事やっているんだと思っていたので、私に何ができるの？と思っていましたが、福祉のプロの方もいるしボランティアの方もいるし一市民もいる。色々な方がいる中で、みんなが意見をどんどん出してまとまっていきました。普段は全然違うところにいるけれど、何かあった時にみんなが同じ方向を向けるところが生駒の強みだと思うし、これからどんどんもっと住みよくなっていくんだろうなと思ったら楽しみです。

▽奈良県薬剤師会　中本：

私は薬剤師の仕事をしています。やっぱり健康が一番大事な仕事ですけども、そこにプラス笑顔をつけていただかないと人生の健康じゃないと思っていますので、笑顔になって帰っていただくということも心がけて仕事をしております。

今からの時代の薬剤師は外に出て、地域の方々といろんなコミュニケーションを取りながら健康のサポートや病気の予防をしていかなければ

いけない。それができるのが薬剤師じゃないのかなと思って、生駒市さんが今回こういう事をされるのであれば私も一緒に、と思って参加させていただきました。

私達自身、足の悪い人を見ているとかわいそうだなと思って、何かをしてあげないといけないな、でもこういう考え自体が差別になっているんじゃないかなというのをすごく思ったんですね。

普通にしてほしいのに、みんながやってくれると。正に僕も同じ事を感じてやっていた事があったんですよ。あの言葉は響きました。

今回いろんな方と会って良かったなと思うのは、全然知らない人がこんな事しているんだなと知れた事を含め、自分の業務に役立つ事もあるのかもしれないなと感じました。

～動画終了～

▽田中：

ありがとうございます。みなさんご覧いただいていかがでしたしょうか？本当に一年半頑張ってここまでやってきたな、という感じがいたします。

実行委員会では令和６年の２月から全体会を基に３つの分科会を立ち上げました。本当に手挙げ式で自らが発信をしてということでした。一つは事例紹介検討分科会、そして交流会検討分科会、おもてなし・PR 検討分科会という３つの分科会が立ち上がりました。

この後は、この中の事例紹介検討分科会の報告を主にしていきたいと思っています。

皆さんのカバンの中にこの分厚い冊子が入っていたかと思いますが、これから発表の中で使うスライドは、資料の中の 32 ページから 40 ページに掲載のあるものですので、そちらと合わせてご覧いただければと思います。

あと一つ、せっかくですので会場の皆様ともやり取りを考えたいなと思っていまして、Slido というものを活用して、もしご意見やご質問があればそれも含みながら、発表の後のディスカッションに活用させていただきたいと思っています。もしご意見やご質問がおありの方は Slido を活用して、スマホで QR コードから読み取りいただき一緒に参加していただきたいと思っていますのでどうぞよろしくお願いします。それではこの事例紹介検討分科会にご協力いただいた方々に、取組の紹

介をしていただきたいと思います。

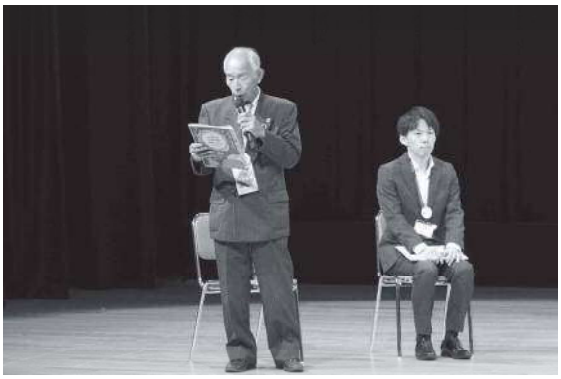
この分科会のメンバーは福祉の専門職に限らず、企業の方や大学院大学の先生や PTA の方も含め多様なメンバーで構成されておりますので、そういった中から産み出されたものを共有したいと思います。

では最初に発表していただける方たち、ご登壇ください。

本来であれば実行委員会ですので、ここで全員オレンジのＴシャツで揃えて登壇しようかなという話もしていましたが、それぞれ個性の塊というか集合体でしたので、自分を表す衣類を着て登壇しようということになり今日ここに集まっています。

それではこれから事例紹介検討分科会でみんながどんな事を考え、アウトプットしてきたのか、順にご報告していきたいと思いますのでみなさんどうぞよろしくお願いします。

井上さんからお願いします。



▽井上：

生駒市農業振興協議会の井上です。3 月にこの分科会の第 1 回目に出席しました。この分科会で何をするのかよく分からなかったのですが、せっかく実行委員として呼んでいただきましたので、サミットのために自分のできる事はしたいと思い、協力してみることにしました。

昨年参加した豊田市のサミットでも事例紹介のプログラムがありましたので、それと同じように、生駒市内で既に行われている進んだ事例を紹介するのかなと思っていたのですが、実際はこのメンバーみんなで話し合いをして、新しい取組に挑戦することになっていたようで驚きました。このとき初めてお話した方もいて面白かったです。私自身普段は畑で農業をやっている人間ですが、地域安全推進員としての活動もしているので、そのお話をしました。

また、幼稚園や小学校の子どもたちに私の畑で農業体験をしてもらっている活動についてもお話したところ、他の委員の方に興味を持ってもらえたことに驚きました。

サミットの本番で何を発表するかはそのときまだイメージができませんでしたが、自分が当たり前と思ってやっている普段の取組も地域共生のテーマにつながるものであることが分かり勉強になりました。以上です。

▽上野：

生駒市福祉政策課の上野と申します。

3 月の初回の分科会ではうまく事務局のイメージを委員の皆さんに共有することができなかったので、事務局の中で何度も打ち合わせを重ねました。

せっかくの全国サミットなので、生駒市で展開されている素晴らしい取組や団体をプログラムの中でたくさん紹介するだけでも十分に意味があります。しかし、事務局としては、サミット開催が決まった当初から、このサミットを開催することに対し、1 回きりの大きなイベント以上の意味を持たせたい、という思いを持ち続けてきました。サミット本番で何を発表するかということだけでなく、サミットをきっかけに集まったこの実行委員会のつながりを、サミットのレガシーとしてサミットの後にも続いていくものとすることこそが重要だということを、協議を重ねる中で再認識しました。

そして、この分科会を生駒の地域共生社会について、実行委員と共に考え対話する場とし、そこ

で起きた化学反応を、サミット本番でありのままに発表するという方針を改めて打ち出して、分科会メンバーに説明しました。それぞれのフィールドで活躍している実行委員同士が、フラットな場で言葉を交わす機会を作ることで、実行委員同士の思いがけないつながりができるかもしれない。また、福祉に関係の薄い仕事や取組をされている方にとっても、普段の活動の中で少しでも変化が起きるかもしれない、と考えたからです。

そこで分科会で会話のきっかけにするために、様々な分野・立場の委員が意見を出すことができる模擬事例を作ることにしました。子ども、教育、高齢分野などを担当する市役所の関係課にも相談しながら、実際にありうる複合的な課題を抱える世帯の事例を5月の第2回分科会に向けて用意しました。私からは以上です。

▽山本：

私は社会福祉法人どんぐりでうみ保育園の園長をしております山本と申します。

5月の分科会では、二つのグループに分かれ、こちらの親子3世代の模擬事例について、もしこんな家族がいたらどうすればいいかを検討しました。

まず孫の健太の状況について説明します。

現在14歳ですが、中学校にはほとんど行かず自分の部屋でネットを見て過ごしています。

先生が家庭訪問したときも、自分の部屋を出ることはありませんでした。健太は幼少期からパパっ子でしたが、小学校2年生のときに父親がベトナムに転勤したところから徐々に学校を休みがちになっていったということです。

次に健太の母、陽子についてですが、現在46歳の主婦です。夫の転勤を機に自分の母との同居を始めましたが、息子　健太が学校に行かなくなったことで気分が不安定になっています。内向的な性格のためか、周囲の人に相談することも難しく、家にこもりがちになっています。

最後に健太の祖母、陽子の母のフサエの状況について説明します。現在76歳の後期高齢者で家事の大部分を何とか担っていますが外出機会がほとんどない状況です。元々は社交的な性格で、夫に先立たれた後も、地域の活動や友人とのお出かけなどを楽しんでいましたが、陽子・健太との同居が始まり、家事などが加齢に伴って負担に感じるようになり気分が低下しています。

このように、親子3世代でそれぞれ何らかの困り事を抱えている事例について検討しました。

私は普段、仕事柄、就学前の児童の事について耳にすることが多いですけれども、高齢者や中学生のひきこもりについてはあまり触れることはありません。しかし、他の委員の皆さんの話を聞くと、こうした事例は決して珍しい事ではないということで驚きました。

これからの社会の課題として、こういった事例について知り、できる事を考える機会はとても重要だと思いました。私からは以上です。

▽加未：

私は生駒市老人クラブ連合会の会長を務めさせていただいております、加未洋八郎といいます。よろしくお願いします。私は若い人たちに学びたい、そしてつながりたい、そういう思いでこの事例紹介分科会の方の所属を希望しました。

これは若い人たちの参加が多いのではないのかなという思いで選択をしたわけでありますけれども、私の選択は当たっていました。良かったです。

と申しますのは、当初、私の同僚と言いますか知り合いが、今度の全国サミットの関わりは付き合い程度、全国サミットが終わったらそれで終わりというところぐらいじゃないのかという話を聞いていました。

私もその言葉が耳に残りながら、この事例紹介検討分科会に所属したわけでありますけれども、ところがどっこい、実際のこの事例紹介検討分科会の皆さん方の姿勢と言いますか出した結論はそうではない。

終着点ではなくて、始まりを確認する、実際この分科会、サミットをきっかけに生まれた新たなつながりというのをテーマにしています。

つまり、終わりではなく、新たなつながりを求めている、ということをこのテーマにも示すほど、若い方皆さん方が中心となって、先ほど事務局からの報告もありましたけれども、終着点ではなく始まりを意味する。

そのような確認に変わっていく、そのような全国サミットへの関わりを、姿勢を持っている、ということを知って、私は大変嬉しかったしありがたかった。

実は 9 月 26 日、私ども生駒市老人クラブ連合会は、創立 60 周年記念大会を行いました。

その場で私は会長の挨拶として、それぞれが持っている得手を、楽しく地域で生かし、そして高齢者の特徴である時間や経験を生かして、世代や団体の違いを超えて、つなぐ横串の役割を高齢者が務めよう。そして、今風に言うとコーディネーターになる。

私は横串の役割という表現を使ったんですけれども、コーディネーターになろう、こういう提案をさせていただきました。

このような提案ができたのも、この事例紹介分科会に所属をして、若いみなさん方と一緒に考え行動した結果だということで、ありがとうございましたと申し上げて、私の報告に変えたいと思います。以上です。

▽村田：

生駒市で広報の担当をしている村田と申します。私の方から今回模擬事例の検討で得られた発見と学びの整理という点で発表させていただきます。

私は普段広報担当ですので広報紙の製作ですとか、生駒の魅力を発信するというようなプロモーションの仕事をしておりまして、市役所で言うと福祉の担当というわけではないのですが、本日登壇しているメンバーも含めて、皆さんと一緒に事例を検討させていただいて、本当にたくさんの学び、発見がありました。

本日は三つにまとめてご紹介させていただければと思います。スライドの赤文字の部分を順番に説明できたらと思いますが、一つ目が関われる主体の広がりという点です。

私がまず一番驚きましたのが、福祉には一見関係なさそうな場所、集まりというところが、孤独や困り事を抱えている人にとっても実は重要な場所になりうるというところでした。

例えば大学や畑、そういった皆さんの楽しいとか、好きということを起点として集まっているような、いわゆる趣味の集いみたいなところも、実は重要な場所になりうるのではないかというような発見がありました。

初めて今回の模擬事例を読んだときに、まずは私自身の家族に置き換えて考えてみました。私は子どもがおりますので、子どもの事であればまず

部屋にこもりがちでしたら一旦小学校に相談してみようかなと、祖父母の介護も少し経験しましたので、高齢者の事であれば一旦ケアマネさんに相談してみようかなということを漠然とイメージを分けながら協議していましたけど、他の委員の皆さんと対話している中で、この過程では大学の中川先生のご発言で、事例の健太くん。この子は大学でやっているようなプログラミング教室に行くことを中川先生はご提案されました。なるほど、福祉以外の選択肢もあるな、という皆さんのこの発言がきっかけになりまして、困り事を抱える人に関わりたいということがぐっと広がり、メンバー自身の視野も広がりました。

二つ目は、予防的アプローチ、支援の時間軸が広がった点です。議論する中でメンバーの一人が、今回の事例のような状態になってしまう前に周囲に相談できる人はいなかったのかな、と発言をされたことがありました。

それがきっかけで、普段から気に掛けたり、声を掛けたりできるような関係性、又は家族以外の人とのつながりも、広い意味での支援と考えるようになりました。支援というと、悩み事を抱えている人にどのように対処するかというイメージもございますけれども、実際には悩み事になる前の段階の関わりも重要であることに気付きました。

最後の三つ目でございます。支援の概念が広がりました。今回の事例では、悩み事を抱えている3人が登場しておりますけれども、それぞれの悩みが始まった直接のきっかけは、父親がベトナムへ転勤し不在となったことですのでそれについても皆さんで考えました。そこでこの人たち、特に息子のしたい事は、実は父親と一緒に住むことではないかな、という話があがり、ベトナムに行くということも状態を改善する一つの方法ではないかな、というアイデアも出ました。

このベトナムに行く、というところが、いわゆる福祉の支援ではないかもしれないですけど、そこにこだわらず、本人、健太君がしたい事は何か、というところをメンバーで率直な視点を持つことで、柔軟な発想がどんどん湧き出てきました。

最後、まとめになりますが、今回の議論の中であるメンバーは、初めにまずどの制度に当てはまるかを考える事に慣れすぎていた、とおっしゃっていました。この模擬事例の検討を通じ、支援の考え方を広げることで、様々な人が関われる余白が広がったように感じました。私からは以上です。ありがとうございます。

▽山口：

社会福祉法人萌の山口健一と申します。よろしくお願いします。普段は精神障がいのある方の支援をさせていただいております。

今までの２回、分科会をやってきまして、第３回の分科会では前回の模擬事例をさらに深める議論を行いました。前回の議論の中で出てきたアイデアを踏まえつつ、親子３世代の困り事に具体的にどう関わっていったらいいか、分科会も顔を合わせること３回、委員それぞれの関係性も深まったことで忌憚なく自分事として意見を出し合いました。そこから見えてきた課題を三つに整理させていただきました。

一つ目は、市民や支援者への情報発信のあり方です。そもそも困っている人がどこに相談したらいいか分からない、相談先はあるけれどその情報が伝わっていないのではないかという点です。発信して終わりではなくちゃんと伝わるような工夫が必要です。

二つ目は、地域の多様な活動や人々同士がつな

がり続けることです。実行委員だけではなく、生駒市内にはたくさんの困り事の解決に協力してくれる人や団体があります。これらがうまくつながっていく。1人ではできない事も、多くの知恵が集まれば何とかなる。あそこのあの人に相談してみよう、顔の見える関係を作っていき、これを継続していくことが大切です。

三つ目は、分野を横断する支援のコーディネーターが必要な事です。先ほどお話させていただいた通り、市内にはたくさんの人、団体の実践があります。しかし、それをつなぎ、調整する役割を担う人、つまりコーディネーターがいない。今はそれぞれで目の前のことに取り組んでいるのが現状です。

困り事を何とかしたい、その思いをつなぐ仕組みにはコーディネーターが必要不可欠です。というお話をさせていただいたら、先程加耒さんの方からコーディネーターに我々がならないか、みたいなお声をかけていただいて、すごく心強いなと思っております。

これらの三つの課題に取り組むことが生駒市の地域共生社会の実現に近づくことを確認し、第3回の分科会を終えました。私からは以上です。ありがとうございました。

▽大谷：

社会福祉法人いこま福祉会の大谷と申します。よろしくお願いします。

第4回・第5回の分科会では、先ほど申し上げた三つの課題について具体的な対応策を検討し、サミット本番での発表の仕方について議論する機会を持ちました。

一つ目の市民や支援者への情報発信のあり方ということの課題につきましては、具体的な情報発信ツールとして、元々市役所が運用されていました孤独・孤立支援ポータルサイト「ここぽ」というサイトがありまして、これを活用できないかというお話がありました。ここから情報を発信し、悩んでいる方々の目に留まるようなツールになれば、相談や支援の入口になるのではないかと期待されます。

地域支援の連携につきましては、今回このサミットで集まった多種多様なメンバーが、福祉や福祉以外でいろんな角度からそれぞれの場で活躍されている方々ばかりで、こうしたメンバーが集まって議論する機会が今後、サミットが終わったから終わりではなくて、地域課題を解決するチームとして続けていくことが重要であるということが話し合われました。福祉の立場から物事を解決する専門的な役割と、地域を支えてこられた方々のそれぞれの専門性が、多様な課題の解決の糸口になると考えられています。それをつなげるコーディネーターの役割が不在という課題に対して、重層的支援体制整備事業が役割を果たす立場になることが期待されています。一つ一つが点で動くのではなくて、このサミットで集まったメンバーのように線でつながり、様々な角度から課題解決につなげていけるような支援の輪が必要とされています。そうした地域の力がまとまっていくためのコーディネーターとして、重層的支援体制整備事業が確立していければということが話し合われました。私からは以上です。

▽宮西：

社会福祉協議会の宮西といいます。よろしくお願いします。今まで事例紹介検討分科会の取組を紹介させていただきました。

今聞いていただきました通り、すごく個性的なメンバーが集まった分科会だと実感しました。

振り返りますと、初回の分科会でイメージの共有ができなかった事、イメージができない事を安易に妥協せず意見を述べた分科会メンバー、その不満を受けて対応した事務局。そこでの仕切り直しがより良い議論につながったのではないかと考えています。スライドの方にサミットのレガシーとして挙げているこのサミット実行委員会の今後の取組についての報告をさせていただきます。サミット実行委員会として集まった分野横断のメンバーは、来年度以降も孤独・孤立対策連携プラットフォームとして活動を継続していきます。

プラットフォームは連携強化、何かあったら頼める関係を主目的の一つとしつつ、情報交換だけでなく、視察勉強会など支援力の向上につながる活動も企画していきます。

SOS を出せない人たちへの対応としましては、プラットフォームのメンバーを中心にポータルサイト「ここぽ」の内容充実に協力します。孤独・孤立支援ポータルサイト「ここぽ」では、悩みを抱えるあなたのための相談窓口や支援を紹介しています。

また、様々な人たちが連携して活動できるよう、支援者団体によるイベントの担い手や参加者募集などの情報発信も行っています。何か協力したいと考えている人、協力者を探している人にも活用していただきたいです。Yahoo！や Google などの検索で、「生駒　ここぽ」を検索していただければ一番上に出てくると思います。参加会場に来られている方もぜひのぞいていただければ幸いです。また、悩み事を抱える人を日頃の活動等でキャッチし、重層的支援へとつないでいきます。重層的支援へはつなぐだけでなく、プラットフォームの下に分科会を設置し、重層的支援事業の参加支援事業と積極的に連携をしていきます。

次のスライドは重層的支援体制整備事業との連携についてのイメージ像、全体像となっております。真ん中に悩み事を抱える住民を中心に、どんな相談も丸ごと受けとめるいこまる相談窓口、孤独・孤立支援ポータルサイト「ここぽ」による情報提供、いこまる相談窓口から上がってきた複雑複合化した課題に対して、コーディネート機能としての重層的支援会議に孤独・孤立対策連携プラットフォームの分科会が連携していきます。参加支援分科会の仮称となっておりますが、こういう形での連携をしていく予定です。

続きまして、支援の入口として、プラットフォームのメンバーは、日頃の活動の中で悩み事を持った人に出会ったら、「ここぽ」やいこまる相談窓口を案内し、積極的に情報を届けます。いこまる相談窓口から重層的支援会議に上げられたケースに対しては、プラットフォームのメンバーも関わっていきます。

次のスライドは分野横断の話し合い、こちらでは複雑な事例は分野横断で話し合い、課題は重層的支援会議で整理をしていきます。この重層的支援会議に孤独・孤立プラットフォームの下に設置する（仮称）参加支援分科会が必要に応じて参加し、支援プランの作成に関わっていきます。

続きまして参加機会の提供と提案、こちらでは（仮称）参加支援分科会では重層的支援会議の支援プランの作成において、本人の希望やニーズに合わせ、地域にある多様な社会参加の機会を提供提案していきます。（仮称）参加支援分科会では、プラットフォームメンバーが行っている活動や把握している多様な活動を対象者の参加機会として積極的に提供提案をしていきます。

生駒市には本当に多様な参加の機会がありま

す。それを実感する事ができた分科会でもありました。今回サミットに参加していただいている会場に来られた皆様も、このサミットの中で生駒市にある多様な参加の機会に触れていただければ幸いかなと思っています。以上で発表を終わりとさせていただきます。ありがとうございました。

▽田中：

皆さんありがとうございました。

座談会に向けて入れ替わりをしますので、みなさん一度ご退席をよろしくお願いします。分科会の報告をしていただきましたけれども、いろいろ会場からご質問が入ってきています。今の発表が男性陣ばっかりだったのが地域共生社会という文脈からするとちょっと不自然かなみたいなご感想があったり、地域の高齢者の団体さんの高齢化によってボランティアの担い手といったところでみなさんどんなことに苦慮されていますか？とかいくつか質問も入っていたようです。

それではみなさんの準備が整いましたので、これから座談会の方進めてまいりたいと思います。残り２０分ほどですがお付き合いのほどどうぞよろしくお願いいたします。それでは順に端的にご所属と自己紹介をお願いします。中川先生からどうぞ。

▽中川：

皆さんこんにちは、奈良先端科学技術大学院大学で教職員をしております中川と申します。

本学は生駒市にありまして、理系の国立大学院大学ということで全国に２校しかない大学院大学となっております。一つはこの生駒市で、もう一つは次回開催地の加賀市の近くにある能美市に北陸先端という私共と同じような大学院があります。これも一つの縁と思います。本日はよろしくお願いいたします。

▽松山：

生駒市民生委員・児童委員連合会の松山です。よろしくお願いいたします。

▽原田：

困難を抱える若者・子どもの支援を行っております株式会社やまとの原田といいます。よろしくお願いします。

▽石田：

一般社団法人　無限の石田と申します。普段は障がいのある子どもや大人の方の支援と、子どもの居場所チロル堂の運営などをしています。今日はよろしくお願いします。

▽溝口：

一般社団法人和草の溝口といいます。フリースクールだったり、地域の子ども食堂だったり、学びと美味しいもので人がつながる場所を作っています。今日はよろしくお願いいたします。

▽川本：

生駒市PTA協議会の川本です。市内の幼稚園、こども園、小学校、中学校 26 校園の保護者の代表が集まって活動しています。今日はよろしくお願いいたします。

▽田中：

時間も短いので早速本題に入っていきたいと思います。みなさんの動画とか報告を聞いていただいて、どうやってこんな風に活動が推進されたのかなと感じてくださった方も Slido からも見えています。なぜこんな分科会しかも手挙げ式で、そこきっかけというか要因というか、そのあたりを石田さん、溝口さんから発表いただいてよろしいですか？

▽石田：

この会の全ては1年前に豊田市で行われたサミットに生駒市さんからバスを貸し切っていただいて、視察をさせていただいたことが全ての始まりでした。最初は全然知らない方と気まずい空気の中、隣同士でお話が始まり、豊田市でのいろいろな発表を聞かせてもらって学びを得ました。その後に皆さんでお食事会・飲み会があり、あの飲み会がやっぱり一番意味があったなと思ったけど、会議や会議室の中では到底できないような普段の活動の内容や、その方の「人となり」みたいなものがご飯を食べながら、お酒を飲みながら、一気にメンバーの「人となり」がわかって、距離がぐっと縮まったという感じがしています。

▽田中：

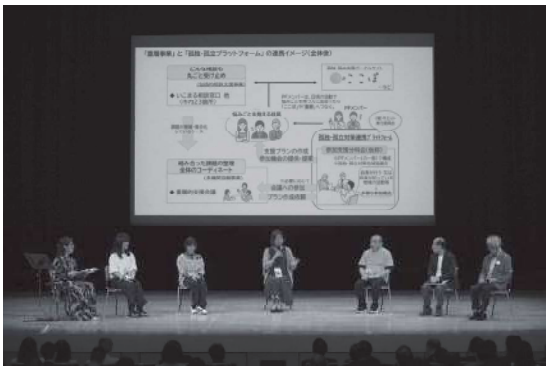
ありがとうございました。午前中の認知症のプレイベントの中で言っていましたね。当事者の方たちは、なかなかいろいろなイベントでは集まらないけども、飲み会をするとみなさん集まるということで、腹を割った話ができるところが良かったのかもしれませんね。溝口さんどうですか一緒ですか。終わりですか。溝口さんらしい。

では次行きます。今回実行委員会、分科会結成に向けて立ち上げの発起人であった二人から豊田市への視察というところが一つきっかけになったという話がありました。実際この分科会に参加されて、何か化学反応が起きたな、自分の中にみたいなことを感じたことについてちょっと教えていただきたいと思います。中川先生いいですか？

▽中川：

私共バイオサイエンスとか情報科学といった理系の大学院でして、福祉というところにどう関係ができるのかと非常に不安でした。

ただ、いろいろと皆様のお話を聞いていくと、介護や福祉という世界の中に科学技術を使うと、もう少し解決できないか、ということがございまして、そういったところを私どもが持つ研究シーズ等で何かお助けができたらな、ということで、非常にネットワークというものの重要さを感じました。



▽田中：

ありがとうございます。

会場の皆さん Slido からも複数の質問で、福祉以外の方がこういった会に参加されたときにどんな事がメリットとして考えられるのか、という質問をうけていましたので、その文脈からいくと次は川本さんお願いします。

▽川本：

生駒市 PTA 協議会の川本です。こんな場所でこんなに多くの皆さんの前で話をすると思っていなかったので、今けっこう心臓がバクバクですけれど、皆さんいつも通り喋ってらっしゃって感激しています。

保護者の代表ということで、PTA で活動はしていますが、保護者の代表と言っても私も本当に中学生男子のただの「オカン」で母親なので、ここに来て大きなことを言ったりとか、会を推進していくというよりは、会議室じゃなくて、本当に現場で起きている声だったり、子育て真っ最中で忙しくしている保護者の声がどんなものだろうとか、こんな事で困っているとか、実はこんな事を思っているな、みたいなことを届けるという役目なのかなと思い参加しています。

実は今年の生駒市 PTA 協議会の活動テーマを「つながる、寄り添う、支え合う」というものを掲げています。それはやっぱりここにきて、本当に生駒っていろんな団体の方がいるなと思い、団体の方たちと知り合ってつながれたことがすごく大きなことだと思いますし、その中で寄り添いあって支え合っていくことがすごく大事だし、私達みんなの一つの救いになるな、と感じたことも、テーマを決めた一つの大きな要因かな、と思っています。

▽田中：

どうもありがとうございます。すごく緊張されているということでしたけど、いつもの通りしっかりお話していただけたかなと思います。

では、民生委員さんの立場として今回こういったサミットに参加されて、民生委員さんの活動の中に広がりが生まれるようなそんなイメージを持てましたでしょうか？

▽松山：

そうですね、民生・児童委員といたしましては地域の住民の困っている事を良き相談相手、そしてその問題をいろいろな機関へつなぐ役があります。だからこの１年いろんな団体の方とお話をさせていただいて、普段聞けないような話も教えてもらえるし、そのあたりがものすごく自分にとっては肥やしになったと感じています。

▽田中：

ありがとうございます。松山さんは民生・児童委員さんとして、今までは高齢者の方のいろんな課題に向き合う機会の方が多かったけれど、障がいとか子育て世代の方たちとお話する中で地域を見る目という部分で、もっと広がりが出たということでしょうか。ありがとうございます。

皆さんはこのサミットの実行委員だけでなく、この後もつながっていく、孤独・孤立対策のプラットフォームで、また広い世界観の中で生駒を見ていくという役割も果たしていっていただくわけですけれども、特にやまとの原田さんはひきこもりの方の支援などをされている中で、この孤独・孤立プラットフォームにすごく関連性が深いと思うのですが、その辺りいかがですか。

▽原田：

「子若法（子ども・若者育成支援推進法）に基づく地域協議会」というのが生駒でも早々に設立していただいて、そこにいろいろな公的な部局の担当の方々、それから県内でいろいろ行っている支援者の人たちが、僕たちはこんな事ができるよ、私達こんな事できるよ、これはこういう行政の人とつながりを持つと解決していく、ということが少しずつ見えてくる会をずっとやってきました。それと同じようなことがこの地域共生でも言えるのかなと思います。

隣は何をしているのかな、そういうことができ

るのであればあの人の助けになるかもしれないから、ちょっと案内してみようとか、そういうことが本当の入口の入口になってくるような気がして、大勢の人が一つの問題について考える機会があるということがとても重要な事だと思います。

▽田中：

ありがとうございます。既にある子ども・若者支援地域協議会というところでの活動をベースに、またそこから連動性を持ってプラットフォームにもつながっていくのか、というご意見いただきました。おせっかい大好き、といつもおっしゃってくださる溝口さん。何かコメントというか、無茶ぶりですけど好きな事喋っていただいて結構ですよ。

▽溝口：

そんなことありますか。何かお題ください。

▽田中：

お題ですか。では同じお題で、今後孤独・孤立のプラットフォームで皆さん活動を継続していただくわけですけれども、今やっている溝口さんの活動もすごく関連性が深いと思うので、それにつなげて、これからの意気込みといいますか、「こんな事できたらいいな」みたいなことをおっしゃっていただけたらと思います。

▽溝口：

ありがとうございます。私もこの実行委員に入れていただいてから、本当に存じていなかった分野の先生方とお知り合いになれて、実際につながることができて、この１年の中で本当に救われた場面が数回ありました。

私は教育の現場にいますが、なかなか風通しが良くないというか、こっちからパカンと開けないとなかなか風が入って来ないような現場にいるので、開けるのはいいけど、次に何が入ってくるかな、というのをいつも楽しみにはしていますけど、やはりこちらからつながっていかないとなかなかつながれないような分野ではあるので、こういった先生方とつながりを持つ事ができて、それをまた教育現場の方に引っ張り込んできて、それのつながった先に子どもたちがいて、地域がある、どういう広がりがまた生まれていくのか、というのをこの１年間すごく楽しみに、これからどういうつながりが生まれていくのかな、というのを楽しみに過ごした１年でした。

▽田中：

ありがとうございます。対話とかつながりとか、これはすごくいろんな政策にも通じる事かなと思っています。

今回皆さんが作りました孤独・孤立対策連携プラットフォームと重層的支援体制整備事業を絶対に連携させていこうということで、孤独孤立のプラットフォームが参加支援の分科会になるといいね、ということで、これからもこの重層とつながりながら地域を良くしていこう、ということをみんなで考えたわけですけれども、どんな事を進めていけばいいかな？といった部分で何かご意見ご希望あれば、ということで、石田さんいいですか。

▽石田：

専門的に福祉の分野をずっとやってきていますが、やっぱり一法人だけではどうしようもない事があって、福祉の業界の中でいろんな縁をつなぎながら、関係性を築いて、いろんな対話をしていますけど、それだけでは行き詰まることがもうたくさん起こっていて、今回このプラットフォームができることを最初に聞いたときは、できるのかな？と思っていました。

誰がその先導するの？そのことができたらもっと大変なことにならないの？と思っていたけど、福祉ではない方々がこんなにもまちの事を考えている、人とのつながりを大事にしようと思っておられる、と知ることができて、だから人を助けるのは福祉の人だけでなくていい、というこんなにも地域の中には人を助けようとする人、つながろうとしている人がいる、ということが本当に希望で、だからつながっているだけでいいという、すごくガチっとしたプラットフォームを作らないと、というところからほどけた感じがしています。

▽田中：

よく何か「緩める」とかそんな事もおっしゃってくれる方がいらっしゃいますけど、ちょっとスライド１枚めくってもらっていいですか。

これは本大会が始まる直前の実行委員会の皆様に、この１年半通して何か皆さんに届けてほしいメッセージを書いてほしいな、という話で、今日の夕方皆さんの音声を入れたメッセージを流そうと思っていますけど、ここにも「緩める」とか、「彩り」とか、「思いやり」とか、「Let's go together」みたいな、「みんなで一緒に」みたいな、力強い言葉もいただいたところでした。時間が押しているので最後に会場にいらっしゃる皆様に、なにか一言端的にメッセージを送っていただきたいと思います。

中川先生からよろしくお願いします。

▽中川：

今日は短い時間でなかなかお答えできませんでしたが、私は一番右下にあります技術の活用と書いております。なかなか介護福祉と技術というところは相容れない部分もあるかとは思いますが、何かしらお助けできる事もあると思いますので、そういったところに携わる皆さまに技術というものを少し知っていただけたら、と思います。今後ともよろしくお願いいたします。

▽松山：

私はこの真ん中あたりに、住民相互に支え合う地域づくりと書かせていただきました。やはり住民の方が協力して支え合う地域というのが地域力を作っていくのではないか、行政だけでは無理なので地域住民がまとまって、自分とこの地域を作っていく形で広げていけたらいいな、という思いで書きました。

▽原田：

支援という入口の中には諦めたり、あるいは統制とかそういう言葉が出てくるけど、諦めないで絶えず何かを探し求めたり、つながっていこうという気持ちさえ残っていれば、どこかには必ずつながれる、あるいは結果が出てくるきっかけがあると思うので、諦めないで頑張っていただきたいと思います。

▽石田：

本当に誰もが予想していないほど、世の中の時間の経過が早くなり過ぎていると思っています。人の価値観があっという間に変わってしまって、抱えている問題は多様化、複雑化して、何かその一つの問題を目の前にしたときに太刀打ちできないようなものを抱えているような人たちが本当にたくさんいるということを日々思います。

もちろんその今助けてほしい方々に出来る事を出来る人が一生懸命やるということは大事ですけれど、やはり普段が大事、平生が大事だと思っています。人はいつでも困りうる存在だということを忘れず、いつ困っても誰かがいれば困っていても生きられる、苦しくなっても次の一歩が踏み出せる、そういう力をみんなが身に付けるようなそういう時代が来たかなと思っています。

そのために対話が必要で、どれだけ毎日の生活の中に私たちが共感を手にすることができるの

か、ということが、困ったときに歩み出せる一歩を作れると思っているので、そういう活動をこれからも頑張っていきたいと思っています。

▽溝口：

私はとても大きな事は分からないけど、日本人の持っている「おせっかい魂」というのを信じていて、その「おせっかい」をするにも周りに誰が住んでいて、どんな人がいるのか、ということを知りたいと思って、知る場所があるというのがすごく大事だと思っています。

ですので、日本人の「おせっかい魂」を発動するためにも、他人に興味を持って自分の周りにどんな人がいて、どんな地域に自分が住んでいるのか、ということを知りたいと思って知ろうとする、そういう場を今後も作り続けていけたら、と思っています。

▽川本：

今回のテーマでも居場所という言葉があったと思いますし、おそらく明日もきっとたくさん出てくる言葉かな、と思うのですが、私は「場」を作るということがすごく大事と思っていて、それはどんなところでもいいし、どんな集まりでもいいと思っています。

ただ一個人でできる事や、一つの集まりでできる事というのは、やはりその中に納まってしまって限界があるかと考えていて、それがさっきも出ていたようなつながりあっていけば、何となくその中で一つくらいは自分に合う場所や上手くマッチする所が見つかっていく、そういうのが居場所なのかな、と思っています。

それはがっちりきっちりとした仕組みというものではなくても、ちょっとつながっているという緩いものでもいいと思っていて、今取り組もうとしているプラットフォームというものが、そのような緩いつながりに結びついていけばいいと思っていますし、ここならできる、と期待もしています。

▽田中：

どうもありがとうございました。人口減少とか少子高齢化とか担い手不足とかいろんなことが言われていますけれども、お互いに知り合って興味関心を持ってつながっていくということがすごく大事。私も日頃から「知る、つながる、生まれる、生み出す」この言葉が好きでいろんな地域活動をやってきました。皆さんに今日どんな事が伝えられたかというのはちょっとクエスチョンなところはありますけれども、みんなの思いが発信できたかなと思います。最後、さっきの発表者と共に皆さんにご挨拶をしたいと思いますので、前半のグループの方も出てきていただいてよろしいですか？

皆さん立ってください。生駒市からのお願いです。このサミットが終わっても次なる未来の会、つぶやき、飲み会も含めて企画したいと思いますが、全員参加でよろしいですか？

▽全員：

おー！

▽田中：

どうもありがとうございました。

第６回　地域共生社会推進全国サミット in いこま

# 特別企画

# 特別企画

**令和６年10月11日（金）16:00 ～ 17:00**

**たけまるホール　大ホール**

## 地域共生社会とコミュニティデザイン

studio-L 代表
関西学院大学建築学部教授
コミュニティデザイナー
社会福祉士

**講師　山崎（やまざき）　亮（りょう）氏**

※本人の希望により、掲載を控えています。